

---

# 非日常は日常だ

和華 流希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常は日常だ

### 【Nコード】

N8387M

### 【作者名】

和華 流希

### 【あらすじ】

世界。地球。いや、この世にはたくさんものがある。人。。。

人は、性格はバラバラ、人それぞれ。十人十色ってやつだ。

そして、たどる運命もちがうし、過去も、家族形成も違う。

もちろん性別も。

普通の人の非日常は

彼らの、過去未来現在であり。

彼らの非日常は

普通の人の日常である。

そんな彼らのスクールライフ。

## そんな彼らのスクールライフ（前書き）

オリジナル作品です。

初小説ですが、暖かい心で見てください。

あてんしょん

- ・一部暴力的表現があります
- ・ストーリーのなかに何名か同性愛者がいます
- ・保険で全ての項目にチェックをいれました
- ・いろいろ残念です（苦笑い）

## そんな彼らのスクールライフ

殴る。殴る。蹴る。殴る。殴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。殴る。

いつもと同じ光景。どうせこのまま、いつもどおり血だらけになるんだ。

誰も来てくれない。いや。誰も気づかないんだ。

殴る。蹴る蹴る。殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴

殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴殴。

だけど、今日は違った。

青い服を着た人達が家に来た。

アイツは血相を変えてドアを閉めようとした。

青い服を着た人達は、その光景を見ていた僕に気づいた。

青い服の人達も血相を変えた。

だって、僕の顔、体、服、腕、あちこちに血がついていたから。

青い服の人たちは無理やり家に入ってきて。

アイツが殴ろうとしたから。抑えて、仕方がなく手錠を掛けていた。

僕には何がなんだかわからなかった。

その後、1人が機械にむかって何か言っていた。

違う人がまた来て、僕を抱きかかえて、家の外へ出してくれた。

僕はその後の記憶がない。

今思えば、青い服の人は警察で。

機械はトランシーバーだった。

「?・・・ち?・・・まち?・・・マチ?」

誰かの声で目が覚めた。

「良かった。死んでるかと思った」

笑いながら言ってくるそいつに

「死ぬわけ無いじゃん。そう簡単に」

と俺も笑って返したあと、そいつを抱き寄せた。

殴られた。

彼氏にさ。

浮気してて。殴られちゃった。

ああ、あれは浮気じゃないよ。

だって、他の男の人と遊んでいたただけだもん。

遊んでいただけで、殴る必要ないじゃん？

乱暴な人は嫌いなので、さっさとさよならすることにした。

町をぶらぶら歩いていたら、親友に逢った。

「あつきー」

「あれ？みちみち。やほー」

「ヒマ？」

「ヒマじゃないけど、付き合ってあげるよ」

「暇人なくせに、よく言うよ」

「みちみちほどじゃないけどね」

「たしかに」

ふたりで笑いあいながらカフェに入った。

告白した。

ふられた。

ずっと好きだったのに。

んだよ。

もっと優しくぶつてくれたっていいじゃん。

きづつくわ。

もういい。

遊べば治るでしょ？多分・・・

？ ？ ？ ？

『もしもし？』

「あー。てる？」

『うん。って。俺しかいねえだろ』

「まあな」

電話越し二人で笑う

『で？』

「ヒマー。かまってよーん」

『わりい、今手が離せない状況でさあ』

「うえー。あいあい、頑張ってくださいー。俺は一人でやりますよ

ー

『わりいって。今度マツクおごるよ』

「まじで？じゃ、俺エビフィレオね」

『あははっ りよーかい』

「おう。じゃーな。」

『あいーっす』

電話を切るとやっぱり、虚しくなる。いつだってそうだ。

「はあ、電話は嫌いだ。」

そっつぷやいて、俺は眠りにつくことにした。

世界。地球。いや、この世にはたくさんものがある。人。

人は、性格はバラバラ、人それぞれ。十人十色ってやつだ。

そして、たどる運命もちがうし、過去も、家族形成も違う。

もちろん性別も。

ちよっぴり、普通の人からはずれてしまった人っていうのは、  
大体同じ場所にいること、集まることが多い。

この、3人もまた。同じようなもので。

この3人に他の『はずれた人』が集まってくるのも時間は  
かからないだろう。

この3人がであうのも。。。ね？



そんな彼らのスクールライフ（後書き）

閲覧有難うございました。

初小説。いかがでしょう。

評価をいただけるとうれしいです。

## そんなこんなで学園生活開始（前書き）

毎回のように視点が変わるこの話。

（だって登場人物軽く30人越えてるんだもの）

前回は3人。今回は、新メンの『凧澤 潤』くんらしいですぜ。

## そんなこんなで学園生活開始

昨日から俺は、高校生。

通うことになったのは、聡明高校。略してソーコー。

近くにアパートなどが少ないので生徒の数も多いとはいえない。

俺はそんな高校にどうしても入りたい・・・入る理由があつて、受験をした。

見事に、合格：と。

今日は、自己紹介をするとかなんとか。

正直言っただりい。でも、面白い奴がいるかもしれないのでサボりはしなかった。

「えー。でわ、出席番号順に自己紹介をお願いします」

『出席番号1番 秋川 翔 です。好きなものは噂とチョコレートですよろしくおねがいします』

俺も好きだよ。チョコ。

『雨宮 亜衣 です！好きなものは、漫画で嫌いなものは嘘です！宜しくです！』

やけにハキハキしてんなあ。『嘘』か。。。

『えと、羽川 潤 です。潤うって字でうるうって読みます。得意授業は音楽です』

ほえー。俺と漢字一緒か。うるうか。。。 すごい名前。

『生川 愁ですよ。好きなモンはサッカー！スポーツは得意です。嫌いなものは勉強です』

おもしれーやつ。最初の喋り方どっかの通販会社の社長みてえ。

『名前は 橘田静 きつとんって呼ばれてたんでそう呼んでくれるとうれしいです。』

『家館 悠太 つす。けたち のけ ゆうた のゆう をとって Qなんて呼ばれてましたー、よろしくつす』

『冴島亜季。得意教科は体育。苦手教科は国語です。あつきーなんてよんでくれるといいなー』

『須嶋 領太です。嫌いな食べ物はリンゴ、好きな食べ物はみかんでーす よろしくでーす』

『祖山 溜一 好きなものはお笑いと、裂きイカです』

『智池 実香子 です。好きなものはクラシックで嫌いなものは騒音です』

『照羽 秋 です。てるあきって呼んでください。よろしくお願ひします』

そんな感じで、面白い奴とかもやっぱりいて俺の番がきた。

「凧澤 潤 です。潤はうるおって漢字。得意教科とか別に

無くて好きな食べ物、甘いもの、嫌いな食べ物、辛いもの。

面白い奴とつるものが趣味です。宜しく」

さらっと言って終わり。みんなあっけにとられてる？

そんなのも見てて面白いから。俺ってつくづくおかしいよな。

そのあともどんどんつづいた。

今日はすぐ終わるから、家にそっコーかえって寝るつもりだった。

そんなこんなで学園生活開始（後書き）

終わりました〜

結構大変ですね、小説書くの。

評価お願いします。

そんなわけで新メンバー（前書き）

いつもの連れに新しいメンバーが来たみたいなパターンですね。

そんなわけで新メンバー

俺は聡明高校に入学した。

今日は自己紹介をした。

とっても気に入ったヤツがいる。

凄い速さで自己紹介をして。

ものすごくカッコよくて。

女子は、速さにビビって口あけてたわけじゃなくて。カッコよかつたんだよね。気づかなかつたんだ。そんなのがクラスにいるのに。

俺もちょっとビビつたね。

帰りそうになるあいつを呼び止めた。

「凧澤！」

『あ？』

なんですかあ？って顔して立ち止まった。

「出会って初めて急に悪いんだけどサア。」

『ああ。』

「ゲーセン行こう」

『は？』

俺は、大体唐突だーっと。

.....

ありや。急で怒るかな？

黙っちゃった。

『くくくく』

「え？」

『面白いなあお前！えっと、矢沢？』

「そうそう、矢沢。矢沢大地。」

『帰って寝ようと思ってたし。いいよ。』

「んじゃあ、きつとんとか、誘ってもいい？」

『ご自由に』

「さんきゅ」

俺は、仲のいい奴を数名誘うことにした。

『あれ？ダイ。じゅんじゅんも誘ったんだ。』

『じゅ、じゅんじゅん？』

『あ。俺が勝手に決めちゃったんだけどさ。潤だからじゅんじゅん。』

『はははっ。初めてそんなアダナで呼ばれた。』

『OKっ』

『いい。いいよ』

「凧澤、爆笑しすぎだろう。」

『んじゃ、俺は凧って呼ぶね』

『くくっ、いいよっ』  
『そうだ。』

笑ってた潤が急に戻った。

切り替え早。

『俺さ、自分の後眠くて聞いてなかったんだよね。その、えとお願いできるっ?』

みちるっちの方を向いて言う凧澤。

「すいませーん。この会話移動しながらでいい?」

『あぁ、ごめんごめん』

いつまでもいけそうに無いからそんなこと言ってみた。

『俺は、桃田。桃田みちる。みちるっちなんて呼んでくれればいい。』

『こいつコレでも頭いいんだぞう!』

『へえー』

「そうそう」

そんなことをしていたらゲーセンについた。

そのまま遊んで帰った。

こんな毎日続けばいいな。と、心の底から思った。

そんなわけで新メンバー（後書き）

もうずっととggggggですね。

評価お願いします。

そんなわけでもっぱり非日常(前書き)

続き

そんなわけでやっぱり非日常

「ちよおつといい？」

ダイに連れられてきたゲーセン。

新しいやつも一緒にと。

俺がゲーセン嫌いな風澤以外しってるくせに。

『なんですか？』

ほらキタ。

『ちよつとさあ、お金貸してくれない？』

俺の体質。

金銭問題に巻き込まれる。

『俺が使った金ではないし、第一友達でも名前も知らないお前に金なんて貸せない』

で、帰ってくるのだったらこれまで苦労していない。

あーっ！早くダイ助けにこいよっ！

「ちよつとさあ。ちよつとだけでいいんだぜ？」

『だから。』

「ん。」

凧澤！いいとこにきたっ！早くダイ呼んできてくれっ！

「??？」

はあ。ダメだ。

「かしてくれよお？」

「んー。家館？なにしてんの？」

バカだー。空気！空気！

「あれえ？友達？そうだ、きみも貸してくれないかな？」

「金？」

あーっ！早くダイこいって！

「うん。金え」

「・・・」

「かしてくれよお〜」

「まっつてて」

「貸してくれるの？優しいネエ！」

凧澤あつ？！

「よっかつたねえ。あいつが払ってくれるってサア」

いや。金借りてるわけじゃないんだけど。

まさか！あいつダイを呼んできてくれるのかっ！

・・・

全然こねえ。

あ？なんだ？

歩いてきたのは凧澤ではなく。

スタイルのいい金髪の・・・女の・・・子？

「んん？姉ちゃんなんだ？俺に用？」

「あのね。ゲームしてたらね、くらくらしてきちゃって。」

「それで？」

ああ、こいつ、色目使ってる・・・しかも、それに・・・だまされ  
てテンションあがってるこいつがもうキモイ、逃げようかな。

「お金もつかっちゃったし、ジュースがかえないの。？番教えてくれればお返しするからあ」

うわー。これ絶対しないパターンだよ。

「わかったわかった。買ってあげようっ」

バカだーーーーー。

男が女の腰に手を回した瞬間。

「きゃあああああつ！！」

つと悲鳴。

なんだなんだとみんなあつまる。

俺もなんだ？とまゆをひそめる。

一人が

「どうしたんですか？」

とたずねると

「っあの人がつ、体を触ってきたんですっ！」

っつ、一言。

うわー。やだやだ。

「本当かつ?!」

「いや違う。違うよ」

「そのあなた。見てたんだろ?!こいつさわったのかつ?!」

えー。俺?

...

難だよ、うなずけてか?

『あー。触ってた触ってた』

金を取られそうになったしかえしーってね。

「お前っ!」

店員が来てあいつを連れて行って、皆も元に戻って。

残ったのは俺と女。

「くっくっくっ!」

あ?なに笑ってた?

『なに笑ってたあなた』

「あつはっはっは！」

『おい』

「あつは、この手が東京でも使えるとはねえっ！」

といいながら、髪の毛をつかみ。

え？髪の毛。

その女はカツラで。

地毛は黒で。

つけまつげを取ったら見たことある顔。

『凧澤っ？！』

「つくつく。」

『おまえ、何でそんなもの持ってんだよ』

「別に女装主義とかじゃなくてな。」

『……』

「いや、これは、使えるからいつも持ち歩いてるんだよ」

『へ、へえー』

凧澤がそんなものをもってるなんて・・・ね

そんなわけでもっぱり非日常(後書き)

000 000

そんなこんなな自己紹介（前書き）

いやいやw

## そんなこんなな自己紹介

「けーたーちー」

『なんだよダイ。いまごろきたって遅いぞ』

「なんだよ、違うんだよ、コイン大量に出て止まらなかったんだよ」

『へー。友達よりコインの方が大切ですかあ』

「ごめんって。でも、もどうやって助かったの?」

『風澤』

と、カツラをくるくる回しながらきゃぴきゃぴ言ってるやつを指差した。

「へえー。女装趣味?」

「だから、違うって。・・・にしてもコレが東京で使えるとは」

『え。お前どこからきたんだよ。』

「俺?俺、山梨。」

「は。東京じゃなかったのかよ」

「んー。山梨、山梨」

『本当お前。女みたい』

きゃぴきゃぴいってるそいつにあきれながら。

『帰らうぜ。』

「そいつはっか。」

とって。ゲーセンを後にした。

そんなこんなな自己紹介（後書き）

あはー。いやもう、執筆能力低いんで。レベル - 1000なんで。

眠すぎるこのごろ大作戦?! (前書き)

えーっと。

読めば解るんじゃないですか？

眠すぎるこのごろ大作戦?!

ゲーセンに行ってから。あのメンバーで行動することが多くなった。

「そうだ、凧。お前山梨出身で、みんなのこと知らないよなー。自己紹介寝てたみたいだし」

『ああ、』

そういえばーとか、思いだしていたら、

「・・・そうだ」

と、目をキラリンとさせながらダイが言った。

「あいつと、仲良くなれたら、コーヒー。あっちと仲良くなれたら、マック。

両方と仲良くなれたら・・・カラオケでいいか。まあ、無理だと思っけど?」

と最初は男、次は女を指差して。そんなことを言われて、カチンときた

『は?やってみねえとわかんねえだろ?』

というか、カラオケ行きたいし、そんなこと言われたら腹立つし。

「っはは。やってみな」

『おつよ。あ。あいつ等名前は？』

「ああ、あつちは、咲木川 八葉。さーきーがーわーはーちーはね。」

『うん。2回も言わなくていいよ』

「そつちは、時珠 恋華」

『名前。。。』

「まあ、頑張れ。」

『八葉。』

「・・・」

めがね。

『おい。聞いてんの？』

「・・・」

『はーちーはー』

「・・・」

ん？・・・こゝ、「コイツ。

「・・・」

目開けたまま寝てやがるっ！

そういうことか。

それなら。

『八葉。八葉。八葉。』

「・・・」

よし、予想どおり。

『はち、はち、はちーはーちーはー……』

こちよこちよこちよこちよっこちよっ

「・・・」

『え……』

なんだこいつ。

どうしよう。コーヒー飲みたいしな。

そうか、そうだよ。



「ひゃー。」

『じゃ、コーヒー』

「は？仲良くなってないだろ？頑張れよー」

『あ。』

しまった。と思った。

眠すぎるこのごろ大作戦?! (後書き)

あー。じゅんじゅんは、楽しい人ですね。

すいませんと呟いたら終わるのこの世界1 (前書き)

題名とか、ちょ痛い仔みたいになってる。

すいませんと呟いたら終わるのこの世界1

『いたっ』

「あっ」

女の子とぶつかった。

『大丈夫？』

「あ、す、すみませんっ」

・・・なんだこれ、ドラマか？

苦笑いしながら俺は教室に向かった。

「ねーこーちゃあーんっ!」

『違っって言うてんだろ』

「なんだよ、なんだよーう、だつてお前”猫川 舞貴”だろ?”ま  
きまき””って呼ばれるのより、ねこちゃんのほづがいいだろっ!」

『両方やだから。』

「はあっ?!」

『かっつてに切れてれば?』

「もういーや、俊のとこいくー」

『あっそ。じゃあーねー』

「ねこっくんっ」

『・・・?なに?』

「知ってる?知ってる?3組に、超カッコイイ男の子がいるんだっ

て！いいよねえ。しかも、マチくんもいるしっ！みちるくんも！」  
『へえー。』

「しーかーもっー！」  
『なに？』

「一番はなんと、どこから来たかわからないっ！と謎の美男！凧澤潤くん！基本はぼーっとしてたりするけど、笑うと天使！」

『それで？』

「え。」

『それで、俺になに？』

「ああっ、そうそうっその人たちと仲良くなってあわよくば、私も・

「・

『はあ、つくづくお前ばかだよな。』

「えへへへ〜ありがとっ」

『ほめてないから。』

「じゃっ」

『あ。』

・・・

チッ

『痛っ』

「す、すいませんっ！」

あ。

ダッシュ逃かよ。

はあ、どっかでごんなことなかったっけ？



眠いや。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

「被告人は？」

・・・

つまらないつまんない。つまんない。

東京に着てみて。初めてしたこと。

TV鑑賞。

とりあえず、ドキュメンタリー番組。

クソつまらないわ。

明日は用事があるから。許してあげようと思う。

あの人に会えるんだからっ！

ああ、いとしいいとしいっ！

すいませんと眩いたら終わるのこの世界1 (後書き)

最後の仔イタイW

愛してると呟いたら壊れる関係2 (前書き)

あ。1とか2は『呟いたらしりーず』です

## 愛してると眩いたら壊れる関係2

『うるるー!』

「なに?」

『今日いくつ?』

「なによあ、にやにやしなから聞いて。」

『だって気になるじゃない!』

「そんな、ゆうちゃんはどつなの?」

こんなこと競ったてつまらないでしょ?ゆうちゃん。

『あたしは4枚。』

「そう。私は6枚。」

『やっぱり減っていくものだね』

「それはそうよ。なんせ、人数が決まってるから。しかもそのなかの一部だし。あ。でも私さつき直接きたよ?」

『ええええっ!いいないなっ!だれだれ?誰よっ?』

「えー。秘密。」

『つーか、うるるも、いい加減彼氏作りなさいよ』

「いーやーよっ。男なんて大々大嫌い!!」

『はあ。』

なにが”はあ”よ。

「つて、ゆーちゃん彼氏一回もできたことないじゃない!」

『いいのよあ・た・しは!あいつ等を振ることがあたしの楽しみよ』

『!』

「えげつな」

『あんに言われたくないけどね!』

「確かに!あっはっは」

私にだっているよ。好きな人くらい。

だけど。

その人に。

そのひとに。

大好きや、愛してるなんて言ったら

嫌われちゃうじゃない。

この関係が一番なのよ。

わかってね。

ゆーちゃん。

愛してると呟いたら壊れる関係2 (後書き)

うるるキタ)・)

後の席の男子はどう思ったんでしょうね。

会話聞いてて(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8387m/>

---

非日常は日常だ

2010年10月9日22時28分発行